

経済闘争の意義

この時代に経済的ストライキと政治的ストライキとの相互関係はどうなっていたか？
政府の統計は、それにたいして上（下——青山）の表のような回答をあたえている。

ストライキ参加者数（単位千人）			
	1905年	1906年	1907年
経済的ストライキ	1,439	458	200
政治的ストライキ	1,424	650	540
合計	2,863	1,108	740

ストライキの両形態が密接不可分に結びついていることは、ここからあきらかである。運動の最大の高揚期（1905年）には、闘争の経済的基礎がもっとも広いのが特徴である。この年の政治的ストライキは、経済的ストライキという強固な、確実な土台のうえに立っている。経済的ストライキの参加者数は、政治的ストライキの参加者数よりも**多かった**。

1906年1907年とには、運動が低調となるにつれて、経済的な土台の**弱まり**がみとめられる。経済的ストライキの参加者数は、1906年にはストライキ参加者総数の10分の4に、1907年には10分の3に低下している。したがって、政治的ストライキと経済的ストライキとは、たがいに力の源となりながら、相互にささえあっているのである。ストライキのこの二つの形態に密接な結びつきがなければ、真に広範な、大衆的な——そのう**え全国民的意義**をおびるような——運動はありえない。運動の初期には、経済的ストライキは、しばしば、おくれたものを目ざまし、ゆりおこし、運動を全般的にし、それをより高い段階にたかめていくという性質をもっている。

たとえば、1905年の第一・四半期には、経済的ストライキは政治的ストライキよりも目だって優勢をしめた。前者のストライキ参加者は60万4千人であったが、後者はわずかに20万6千人であった。ところが、1905年の最後の四半期には、この関係は逆になった。経済的ストライキ参加者数は43万人になっているが、政治的ストライキ参加者数は84万7千人であった。これは、運動の初期には、多くの労働者が経済的闘争をもっとも重要視したが、最大の高揚期には逆になった、ということである。だが経済的ストライキと政治的ストライキとの**結びつきはつね**に存在していた。くりかえして言うが、この結びつきなしには、真に偉大な運動、偉大な目的を実現する運動はありえない。

労働者階級は、政治的ストライキのさいには、全国民の先進的階級として行動する。プロレタリアートは、こういうばあいには、ブルジョア社会の諸階級のうちのひとつとしての役割を演じるばかりではなく、主導者（ヘゲモン）、すなわち、指導者、先進者、首領の役割を演じるのである。運動のうちに現れる政治思想は全国民的性格をおびている。すなわち、全国の政治生活の基本的な、もっとも根ぶかい諸条件に触れているのである。政治的ストライキのこうした性格は、——1905～1907年代のすべての科学的研究者が指摘しているように——すべての階級のうちに、とくに、もちろん、住民のもっとも広範な、多人数からなる、民主主義的な諸層、農民その他のうちに、運動への関心を呼びおこした。

他方では、勤労者大衆は、経済的要求なしには、自分たちの状態を直接即座に改善することなしには、国の全般的な「進歩」をけっして考えようとはしないであろう。大衆が運動にひきいれられ、それに精力的に参加し、それを高く評価して、英雄的精神、自己犠牲、不屈さ、偉大な事業への献身を発揮するのは、働くものの経済状態が改善されるばあいにかぎる。そうでなければ事はうまくいかない。なぜなら「平時」には、労働者の生活条件は信じられないほど苦しいからである。生活条件の改善をもとめてたたかううちに、労働者階級は、同時に、精神的にも、知的にも、政治的にもたかめられ、その偉大な解放目的を実現する能力を高めていくのである。

商工省が出版したストライキ統計は、労働運動が一般的に活気づいた時代に労働者の経済闘争がもっているこの大きな意義を完全に確証している。労働者の攻撃が強ければ強いほど、彼らはますます多くの生活改善をかちとっている。「社会の同情」も、生活の改善も、闘争の高度な発展の結果である。自由主義者は（解党派も）労働者にむかって、諸君にたいする「社会」の同情があるとき諸君は強いのだ、と言っているが、マルクス主義者は労働者にむかって別なことを言う。諸君が強いとき諸君は「社会」の同情をえるのだ、と。このばあい社会とは、住民のありとあらゆる民主的な階層、小ブルジョアジー、農民、労働者の生活と身近に接触しているインテリゲンツィア、勤め人などと解すべきである。

ストライキ運動は 1905 年にもっとも強かった。そこでどうか？ われわれは、ほかならぬこの年に労働者がもっとも多くの生活改善をかちとったことを見る。1905 年のストライキ参加者 100 人につき、**なにも**えずに闘争をおわったもの、つまり完全な敗北をなめたものは、**わずかに** 29 人であったことを、政府統計はしめしている。10 年間（1895～1904 年）に、ストライキ参加者でなにもえずに闘争をおわったものは 100 人中 52 人であった！つまり、運動の大衆的性格は、闘争の**成功率**を最大の規模に、ほとんど 2 倍ちかくにも高めたのである。

だが運動がよわまりはじめたとき、闘争の成功率もまた減少しはじめた。1906 年には、ストライキ参加者 100 人のうち、なにもえずに、はっきりいえば敗北のうちに闘争をおわったものは 33 人、1907 年には 58 人、1908 年には 100 人中 69 人にもなった!!

このように、数年にわたる科学的統計資料は、経済的ストライキと政治的ストライキとの結合が必要であり、真に広範な全国民的な運動ではこのような結合が不可避的であるという、自覚した各労働者の体験と観察を完全に確証している。

第 18 卷 P78~79 『経済的ストライキと政治的ストライキ』

『ネフスカヤ・ズヴェズダ』第10号、1912年5月31日

ポイント

ストライキの両形態が密接不可分に結びついていることは、ここからあきらかである。運動の最大の高揚期（1905年）には、闘争の経済的基礎がもっとも広いのが特徴である。この年の政治的ストライキは、経済的ストライキという強固な、確実な土台のうえに立っている。

政治的ストライキと経済的ストライキとは、たがいに力の源となりながら、相互にささえあっているのである。ストライキのこの二つの形態に密接な結びつきがなければ、真に広範な、大衆的な——そのうえ全国民的意義をおびるような——運動はありえない。運動

の初期には、経済的ストライキは、しばしば、おくれたものを目ざまし、やりおこし、運動を全般的にし、それをより高い段階にたかめていくという性質をもっている。

勤労者大衆は、経済的要求なしには、自分たちの状態を直接即座に改善することなしには、国の全般的な「進歩」をけっして考えようとはしない。生活条件の改善をもとめてたかろううちに、労働者階級は、同時に、精神的にも、知的にも、政治的にもたかめられ、その偉大な解放目的を実現する能力を高めていくのである。

労働者の攻撃が強ければ強いほど、彼らはますます多くの生活改善をかちとっている。

「社会の同情」も、生活の改善も、闘争の高度な発展の結果である。自由主義者は（解党派も）労働者にむかって、諸君にたいする「社会」の同情があるとき諸君は強いのだ、と言っているが、マルクス主義者は労働者にむかって別なことを言う。諸君が強いとき諸君は「社会」の同情をえるのだ、と。

だから、わたしたちは「社会」の同情を得るために、嫌われないように息を潜めて、くちをふさいで時がくるのを待つのではなく、資本主義の矛盾を、労働者の要求を、はっきりと大きな声で労働者に訴え、労働者の力を強めなければならない。